歴史的仮名遣いを現代仮名遣いになおす方法

法則一（ただし、単語の最初の平仮名は直さない。）

はひふへほ　　例　はな
←←←←←　　←（直さない。）
わいうえお　　はな

法則二（ア段からオ段にするときは同じ行での変化）

ア段＋う・ふ→**オ**段＋う
（かう　　→　こう）

法則三

イ段＋う・ふ→イ段＋**ゅ**＋う
（しふ　　→しゅう）

法則四（エ段からイ段にするときは同じ行での変化）

エ段＋う・ふ　→**イ**段＋**よ**＋う
（せう　　→しょう）

理解できない人は

かう→こう　きう・きゅう　けう・きょう
さふ→そう　しふ・しゅう　せふ・しょう
たう→とう　ちう・ちゅう　てう・ちょう
なふ→のう　にふ・にゅう　ねふ・にょう
はう→ほう　ひう・ひゅう　へう・ひょう
まふ→もう　みふ・みゅう　めふ・みょう
らう→ろう　りう・りゅう　れう・りょう

その他

「ぢ・づ」→「じ・ず」　「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」
「む」→「ん」　「くわ」→「か」

のどこかの行を暗記しておけば何とかなる。

中学校　国語　古文　～歴史的仮名遣い①～

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

歴史的仮名遣いのパターン（10点×10問）

①ぢ→□　②づ→□

③む→□　④ゐ→□

⑤ゑ→□　⑥を→□

⑦くわ→□

⑧「ア段の音＋う（ふ）」→「オ段＋う」

さふ→□□

⑨「イ段の音＋う（ふ）」→「イ段＋ゆう」

きう→□□□

⑩「エ段の音＋う（ふ）」→「イ段＋よう」

てふてふ→□□□□□□

ハ行の仮名は、言葉の頭にあるもの以外、
ワ行に変わることも覚えておこう！
（例　あはれ　→　あわれ）

点

中学校　国語　古文③　～歴史的仮名遣い②～

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

一　次の一線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。（１０点×１０問）

(1)

今は昔、竹取の翁と①いふものありけり。

①

点

野山にまじりて竹を取りつつ、②よろづのことに③使ひけり。

②

③

名をば、さぬきのみやつこと④なむいひける。

④

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと⑤うつくしうてゐたり。

⑤

(2)

春はあけぼの。⑥やうやう白くなりゆく⑦山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

⑥

⑦

夏は夜。月のころはさらなり、闇も⑧なほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

⑧

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと⑨近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、⑩飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

⑨

⑩

中学校　国語　古文　～歴史的仮名遣い③～

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

一　次の―線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。（10点×10問）

点

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、①をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ②揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、③願はくは、あの扇の真ん中射させたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を④向かふべからず。いま一度本国へ⑤迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせ⑥たまふな。」

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつぴいて⑦ひやうど放つ。小兵と⑧いふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、⑨ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

「御定ぞ、つかまつれ。」

と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつぴいて、しや頸の骨を⑩ひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

（「平家物語」による）

①	③	⑤	⑦	⑨

②	④	⑥	⑧	⑩

中学校　国語　古文　～歴史的仮名遣い④～

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

一　次の―線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。（10点×10問）

点

これも仁和寺の法師、童の法師に①ならむとする名殘とて、各遊ぶことありけるに、②酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、③つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限りなし。

しばし奏でて後、④抜かむとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、⑤いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首の⑥まはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らむとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に、帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師（くすし）の許、率（い）て行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許（もと）にさし入りて、むかひ⑦居たりけむ有様、さこそ異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教へもなし」といへば、また仁和寺へ帰りて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。

かゝる程に、或者の⑧いふやう、「⑨たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ、たゞ力をたてて引き給へ」とて、藁の蒂（しべ）をまはりにさし入れて、金を隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺（か）けうげながら、抜けにけり。からき命⑩まうけて、久しく病み居たりけり。

（「徒然草」による）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

見たことがない文章でも、歴史的仮名遣いの読み方は一緒だよ。
大まかな内容を捉えられるようにしよう！

中学校　国語　古文　～歷史的仮名遣い⑤～

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

一　次の―線部の歷史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。（１０点×１０問）

点

おのれ古典（イニシヘブミ）をとくに、師の説と①たがへること多く、師の説のわろき事あるをば、わきまへいふことも②おほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これ③すなはちわが師の心にて、つねに④をしへられしは、後によき考への出來たらんには、かならずしも師の説にたがふとて、なはゞかりそとなむ、教へられし、こはいと⑤たふときをしへにて、わが師の、よにすぐれ給へる一つ也、大かた古へを⑥かむかふる事、さらにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあらず、又よき人の説ならんからに、多くの中には、誤リもなどかなからむ、必わろきこともまじらではえあらず、そのおのが心には、今はいにしへのこゝろことごとく明らか也、これをおきては、あるべくもあらずと、思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよきかむかへもいでくるわざ也、あまたの手を經（フ）るまにまに、さきざきの考へのうへを、なほよく考へ⑦きはむるからに、つぎつぎにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず、よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、⑧いふかひなきわざ也、又おのが師などのわろきことを⑨いひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきをしるごなし、師の説なりとして、わろきをしりながら、いはずつゞみかくして、よさまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ⑩たふとみて、道をば思はざる也、宣長は、道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古への意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけむことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと、そしらむ人はそしりてよ、そはせんかたなし、われは人にそしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古への意をまげて、さてあるわざはえせずなん、これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや、そはいかにもあれ

（本居宣長「玉勝間」～師の説になづまざる事～による）

①　③　⑤　⑦　⑨

②　④　⑥　⑧　⑩